
星空の記憶

柳瀬亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の記憶

【Zコード】

Z9734Y

【作者名】

柳瀬亮

【あらすじ】

レストラン『クレモンティース』でバティシエとして働く御影恵
みかげめぐみ
は、ある日レストランの店長に呼び出され、突然解雇されてしまつ
た。納得ができない恵は、再度抗議をしようとしたが、店長室の扉を叩こう
とするが…。衝撃の事実が発覚してしまつ…。

プロローグ

「ふう～、やつと終わった……」

都内の有名ホテルに隣接するレストラン『クレモンティーヌ』の厨房で、一人の女性が安堵の声を上げた。

「あ～、疲れたあ～……。今日は団体客が多くてずっと立ちっぱなしだったもんな～」

彼女の名前は御影恵みかげめぐみ、高等学校の調理科を卒業後フランスへと留学し、パリ近郊の小さなお城を改装した日本人向けのパーティーシェ学校に通い経験を積み、帰国後このレストランで女性パーティシェとして働き始めた。

明日の日替わりデザートとして提供する、ラズベリーをたっぷり使ったワインゼリーの仕込みをようやく終えて、棒のようになつた足を幾度となく片手で揉み解しながら、用の済んだ調理器具を洗い始めた。

「ああ～、足がパンパンだわ。帰りにマッサージ行こうかな？……いやいや、お金は節約しないと。いつ何があるか分からんのだしどうせ」

…

パーティシェの世界はそう甘くない。ほとんどが男性従業員という男社会の上、恵の月給はわずか14万円。ボーナスも寸志程度で、社会保障もない。朝から買い出しと下準備が始まり、閉店後も片付けと翌日の仕込みで毎日17時間労働。休日も週に1日しかなく、25歳の女性には辛くて厳しい、試練の日々を送っていた。

「御影ー！」

恵が洗い物と足のマッサージを終えた所で、フロアマネージャーが厨房に顔を出した。

「マネージャー、お疲れ様です。…どうしたんですか？」

「店長が君を呼んでるよ」

「…店長が？…私を？..」

恵が店長に呼び出しを受けたのは初めてのことだった。

「今すぐ店長室に来ててくれって」

「……いつたい何の用かしりっ？」

「あ、それは店長に聞いてみないと…」

レストラン『クレモンティース』の店長は、元々雇われシェフだったが、輝かしい技術力を買われて店長にまで登りつめた実力者。現在は経営に専念しているため、厨房に立つことはない。そのため、従業員が店長と顔を合わせる機会は皆無に等く、恵には呼び出しを受ける心当たりも、店長との接点も一切なかつた。

「分かりました…。じゃあこのワインゼリー、冷蔵庫に入れておくください」

「はいよ」

甘酸っぱい大人な味に仕上がったワインゼリーをフロアマネージャーに託し、恵は駆け足で店長室へと向かった。この先訪れる波乱に満ちた生活の幕開けとも知らずに…。

第一話『やうばクレモンティーム』

「ン、ン。

店長室の扉を叩く音が、廊下に小さく響き渡った。「どうぞ」の声を聞き、恵は扉を開けた。

「…失礼します」

中へ入ると、店長が革の椅子に座り、手に持った書類をパラパラと捲っている。

店長室は、まるでハウスキーパーが片付けたかのように整理されていて、左手には本棚、右手には応接間へと続く扉が見える。これから何を言われるかも分からぬ初めてのシチュエーションに、恵は不安を募らせていた。

「ああ、御影くん。待つてたよ」

書類を一旦机の上に置き、店長が立ち上がった。ツカツカと革靴の音を立てながら、扉近くにいる恵の方に歩み寄ってきた。

「あの…、私に何か用でしょうか?」

「……うーん、それなんだがねえ…」

店長の顔が突然曇りだし、髪の薄い頭を搔きながら、田線を恵から逸らしてしまった。

「…少し言い辛いんだがねえ。君…、ここで働いて何年になる?」

「…もうすぐ一年になります」

「やうなんだよねえ、一年も経つんだよねえ。月日が経つのは早い…」

奥歯に物が挟まつたようなモノの言い方を始めた店長に、恵の不安は頂点に達した。一体なぜ自分を呼び出したのか早く知りたくて、話題をふりだしへと戻した。

「あの、『用件は?』

「来月で辞めて貰えないか?」

「…えつ?」

ふりだしへ戻した瞬間、恵はストレートパンチを喰らつてしまつた。頭の中が真っ白になり、現実を受け止められない恵に、店長は追い討ちをかけるように解雇の理由を語り始めた。

「お客さんの評判が、最近良くないんだよねえ、君い。…デザートが不味くなつたつて」

「不味くなつた?」

「ああ。…腕が落ちたんじやないか?」

店長は人をバカにしているような位置まで眉毛を上げ、重度の歯槽膿漏であろう汚い歯茎を見せながら、解雇の理由を恵の力不足だと説明した。あまりに理不尽な説明と、店長独特の口癖に、恵の心

の中で別の感情が湧き上がっていた。

「…私はここで働かせて頂いてから、一度も材料を変えたり、作り方を変えたりしていませんが？不味くなつた、腕が落ちたという理由は納得できません」

「とーにかくねえー君はクビなんだよクビ。来月で退職してもせりうよー！」

恵が若干強気に口答えした瞬間、店長が遮るよつて恵を捲くし立てた。

「…そんな、急に言われても」

もう何を言つても無駄なのだと、恵が絶望の崖っぷちに立たされ戦意を喪失した所で、店長がトドメの一発。

「家は伝統あるホテルに隣接している由緒あるレストランなんだ。
…落ち目のパティシエはいらない」

「落ち皿…どうして？」

崖っぷちから海へと蹴り飛ばされた恵はショックを受け、放心状態となり、返す言葉が何も出てこなかつた。

「話は以上だ。…じゃあ来月までよろしく頼むよ」

「…………はい」

恵は土左衛門になつて海に浮かんでいた。店長室から出で、廊下

をフランソワと歩き始めた恵の頭の中は、海霧のよつよモモヤモヤとしている。

「…………

霧が晴れると、店長の憎らしげの顔と口癖、そして何より「落ち田のパティシエ」という言葉がリピート再生で流れる。100回以上リピートされた所で、恵の頭の中は店長への憎しみで満ち溢れた。

「私がクビッてどういう事？嘘でしょ？一年も働いて来たのよ。一生懸命頑張って働いたのに…。パリに留学までして、やつとパーティになつたのに…。こんな形で職を失うの？」

憎しみの波が、土左衛門になつた恵を陸まで押し上げ、崖を這い上がらせていた。

「……やつぱり納得できない

更衣室へと向っていた足を、店長室に向右転換して歩き始めた。童顔で癒し系の姿勢からは想像できなにほど、昔から氣の強かつた恵は、不服と感じた判決には異議を申し立てるタイプだ。

恵が再び店長室の前へと戻り、扉を叩いた瞬間、店長室の中から聞き覚えのない女性の声が聞こえてきた。

「……ん？」

店長室の扉が少し開いていた。さつきは放心状態で店長室を出てしまつたので、キッチンと扉を閉めていなかつたのだ。

扉の隙間から中の様子を見てみよつと、恵はそっと覗き始めた。

「ねえん～あのダサい女、本当に辞めてくれるかなあ～？」

アニマル柄のカットドレスを着た巻き毛のキャバ嬢っぽい女が、店長の腕を掴みながら、猫なで声で甘えている。あんな見知らぬ女は、やつを店長室には居なかつたはず。恐らく応接間に潜んでいたのだらう。

「だーーじょうぶう！解雇通知したんだ、嫌でも辞めやせるわ」

店長はキャバ嬢の髪を優しくなでなでしながら、元から気持ちの悪い笑顔を更に気持ち悪くさせて、恵の大嫌いな口癖を垂れ流していた。

「あきにゃんね～、有名にやホテルレストランで、あきにゃんのオリジナルお菓子をいっぱい作るのが夢だつたの～」

「やうか～、アッハハ。あきにゃんは本当に女の子みたいな夢を持つていたんだな～」

「うん～あきにゃんオニーヤの子だもん。あ～ん、来月まで待てないよお～」

「一ヶ月なんてあつと言つ間だよ。それまで一緒に、あきにゃんが作る口替わりデザートを考えよつな」

「ああ～ん、嬉しい～い～あきにゃんと一緒に新しいお菓子考えてくれ～」

恵は知つた、何故解雇されたのか。

「僕たちみたいに、あまへくてトロけちゃこなつなお菓子にして
ね」

「わあおひーーIt's a Sweet World!」

ブルブル怒りに震える両手を抑えることはできなかつた。恵はバ
ーン！と音を立てて扉をぶち開けた。

「……おい！」

恵が店長室に入ると、一人の表情は凍りついた。キヤバ嬢は両手
で口を押さえながら目を真ん丸くして、店長は青い顔で若干白
目が多くなつている。

「…………そつこいつ」と

恵がホラー映画の心靈にも負けないほどの、恐ろしいゆっくらし
た口調で一人に歩み寄る。

「こや、あの……、これは……」

「あきこちゃん」「ワーカー！」

動搖している店長を思い切り睨みつけながら、まっすぐ向かつて
いく恵は、ついにぶち切れてしまつた。

「……客の評判が悪くなつたですって？……デザートが不味くなつたで
すって？『テタラメ言いやがつてこのウスラタヌキ！』

恵が暴言を吐いた瞬間、店長は顔を真っ赤にして恵を指差した。

「君！誰に向かつてそんな口を叩いているんだ！ん？」

「うう、さ、わー、ウスラダヌキに言つてんだよー、私を本氣で怒らせた
ひじりなるか…」

恵の右手は既に準備万端だつた。この怒りは殴らないと収まらない、自分の性格は自分が一番良く分かつていた。

「レバニッシュ様へ~!~」

自分の「」を「あせ」や「ん」というキャラバ嬢の悲鳴と共に、顔面パンチを喰らった店長は、田を真っ白にして倒れ込んだ。

革
しはなくすると店長の鼻の穴から血がホタホタと垂れ始め
靴の擦り跡もない美しい床を汚していた。

第一話『初めての出会い』

「で？ 即日クビ？」

「わづ、クビ。…嫌なら傷害罪で訴えるって言われたわ」

恵が店長に強烈な顔面パンチを喰らわせた直後、店長室にはレスラン『クレモンティース』の関係者達が物音を聞きつけて一斉に集まり、恵は即強制追放、懲戒解雇された。

無職になつた恵は、トボトボ歩きで血モマニションを田指しながら、携帯で友達に今日の出来事を長電話していた。

「恵も馬鹿ねえ、ボコボコにしなければ不当解雇で訴えられたのに

「だつて頭に血がのぼったんだもん。殴らないでいられる訳ないじゃない、愛人を雇うために私をクビにしたなんて事実を知つたら…」

「分かるわあー、私ならぶつ殺してるわ。ギャッハハハハ

「笑い事じやないわよ。私…今日から無職だわ」

友達の名前は五十嵐和沙いがらしかずさ、夜の世界で働いている中学からの同級生だ。彼女は恵が素のままで付き合える唯一の友達で、悩みや愚痴などをずっと語り合つてきた。今日起きた恥ずかしい事件も、和沙になら全て話せる…そんな関係だ。

「ハローワークには行つたの？」

「そんなのまだ行つてないわよ。今日解雇されたのよ?」

「ふう～ん、じゃあ明日私と一緒に行きましょ～つ? 買い物にも付き合つて欲しいし…」

「買い物? そんな気分になれないわよ」

「なれなくとも来てちょうだい! 色々話も聞いてあげるから。明日17時にいつもの駅前ね」

和沙が強引に約束を取り付けた所で、携帯はプツンと切れてしまつた。

「ちよつ……つたく、いつも一方的に決めちゃうんだから…」

携帯の向こうでは、和沙が大慌てで出勤の準備をしていた。恵のことは心配だつたが、長電話している時間はなかつたのだ。

「もひ、この忙しい時に恵つたら…。でも…クビになつちやつたのね。あれ? 昨日買ったファンデがない…。パティシエになれたこと、あんなに喜んでたのに…。ああ、あつたあつた。明日は恵を元気づけてやるつ…。やだつ、ナチュラルオーネイルにしたの失敗だつたわ、色が黒い! こんな暗い色のファンデーションよく売れるわ~男用じやないの? …まあ、私も元は男だけど…ギャッハハハハ」

そう、恵の友達である和沙は、ニュー・ハーフ・パパで働く元男性なのだ。恵が男友達として仲良くしていった同級生の和男は、恵が留学から帰国した時、和沙になつていた。つまり、和沙も心と体の留学をしていたのだ。

和沙が普段より暗めの色に仕上がった化粧を終え、ウェストカツトロングドレスの衣装に着替えて家を出る頃、恵はシャツターの降りた公共職業安定所の前に立っていた。

「ここがハローワークか…。そりや閉まってるわよね~、営業時間は何時までなの? ゲッ、19時まで? ハローワークって本当に不親切ね」

営業時間を確認した後、入り口近くにさしていた就職活動用のパンフレットを一枚手に取り、自分のバッグに入れた。「はあ~あとため息をつきながら、再び歩き始めようとした恵の眼中に、ある看板が飛び込んできた。

「…癒しのバー、オリオン?」

道路に面したハローワークの隣にそびえ立つ商業ビルの1階に、美しい星空が映し出されたLEDビジョンの看板が出ていたのだ。

「…ずいぶんオシャレな看板だと思つたけど、飲み屋か。…ウチの近所にこんなお店があつたの気付かなかつたな。…でも一人で入るのは気が引けるし、飲んだくれたオヤジとかに絡まれたら嫌だし、だいたい無職になつた日に飲んだくれるなんて絶対イヤだわ」

恵がオリオンの前を立ち去ろうとした時、急に扉が開き、「おしゃれなお店だつたね~、疲れも取れたしそうじく癒されちゃつた~」

「バー・テンも格好良かつたね！」これからハマつちやいそう！」

テニンションの高い「」の会話をバツチリ聞き、一人が駅の方向へ去つて行つたのを確認した所で、恵は決意する。…私も癒されたい、と…。

チリンチリン。

バー店内に入ると、心地の良い音楽が流れ、星をイメージした癒しの装飾達に出迎えられた。カウンターがメインの落ち着いたバーの雰囲気に、傷ついた私の心にぴったり！と恵は期待を膨らませていた。

「…」んばんば

「こりひしゃこませ、じつぞお座りください」

恵以外の客はいなかつたが、カウンター・テーブルの向こうに、まるでモデルのような容姿をしたロングヘアのバーテンダーがにつづと微笑んでいた。

「…わあ～、オシャレなお店ですね」

「ありがとうござります。…こちらがメニューになります」

「あ～、じつもありがとう

温かいおしごとメニューを渡され、顔面パンチを喰らわせた右手を含む両手を拭きながら、じっくりカクテルメニューを眺めた。

メニューは豊富で、どれにしようか正直迷ってしまったが、お店の雰囲気にピッタリなカクテルを注文することにした。

「…星空のカクテルで」

「かしこまりました」

シャカシャカ。

バー・テンダーがカクテルを作っている。深いため息をつきながらカウンターに肘をつき、シャカシャカ振られるシェイカーをじつと見つめながら、今日起きたことを冷静に考えていた。一年勤めたレストランをクビになり、社会から追放された。学歴も若さもない自分は再就職できるのだろうか…、またパーティ・シエとして雇つてもらえるのだろうか…、明日からの生活はどうなるのだろうか…、不安でいっぱいになつた頃、カクテルは出来上がつた。

「お待たせしました」

恵の不安を表しているかのように、銀色のシェイカーからグラスに移されたカクテルの色は、深いブルーだつた。

「わあ、青い！」

「ブルー・キュラソーで星空をイメージしています」

「へえ～、そうなんですか…」

恵はセンチメンタルな気分に浸つっていた。ブルー・キュラソーを使つたカツプケーキを、昔レストラン『クレモントイース』の日替

わりデザートで作ったことを、ふと思い出してしまったからだ。

もう自分は、あのレストランで働くことはないのだと…実感が湧いて来た恵は、すべてを忘れるかのようにゴクゴクと星空のカクテルを飲み始めた。

「あ～、サッパリとしたレモン味ですね。見た目も綺麗だし、すごく美味しいです」

「…ありがとうございます。…お美しいお客様さんにはピッタリですよ。今日はお一人なんですか？」

「やだ…美しいだなんて…女性が一人でバーに来るなんて、おかしいですか？」

「そんなことありません、お一人でも大歓迎です。もし良ければ、お話し相手になりますよ」

「私、そんな寂しそうに見えます？」

「見えますよ…。」こんなに美しいのに、物思いにふけていて、まるで人魚姫のようだ…」

バーテンダーは営業トークで言っている訳ではなく、本気で恵を口説いていた。恵は長身で脚が長く、スタイルは群を抜いている。長い髪と筋の通つた鼻、品のある口元と男性を虜にする澄んだ瞳は、恵が持っている唯一の武器である。そう、唯一容姿だけは良いのである。逆に言えば、容姿以外の部分はパーティションの才能以外、何も持っていない。今夜も一人の男が、容姿から恵を口説いてすぐに後悔した。

「ふざけんなつーのよー」

「…」

時が経ち、恵がカクテルを何杯飲んだか分からなくなつた頃、遂に恵の本性が現れてしまった。そう、酒癖が悪いのだ。

「一生懸命働いたのに、私の一年を返せつて言つのよーあのウスラダヌキ…ひつぐ。星空のカクテルおかわりー濃くしてねロンゲの兄ちゃん!」

普段から悪い口は、酒のせいで更に悪化していた。

「…お密さん、もう止めた方が…」

「何? 辞めた方がいいですつて? 私に解雇通知してるの? 私はクビ?」

「はあ? 何をおっしゃつてるんですか?」

呆れ果ててドン引きしてこるバー・テンダーに絡む恵は、怒りと共に椅子から立ち上がつた。

「あきにゃんだと? 笑わせるなあーーーお前らを絶対ぶつ飛ばしてやるからなあー!」

立ち上がった瞬間、恵はバランスを崩し、意識が遠ざかってしまった。

「ああつ、急に立つたらまめいが…、ああー…、ああ…」

「お姫さん…」

バタン…と恵の上半身がテーブルに大の字で倒れこみ、足はカウンターに宙ぶらりん状態で寝てしまった。

「う…、う…ん…。やだ…、いつの間にか寝ちゃったんだわ…」

どれだけの時間が経過したのだろうか。恵が目覚めると、装飾のLEDは全て消えていて、店全体の照明も薄暗くなっていた。バー・テンドーは何処へ行つたのだろう、恵が周りを見渡した。

「…………やだ」

後ろのボックスソファに、バー・テンドーではない一人の男が長い足を持て余すように座つていた。ボックスステーブルの上には山積みの明細、売り上げを計算しているようだ。

「ん？」

男がこちらに気付いた。三十歳くらいだろうか、長身と肩幅の広い体格、座っているだけで威圧感があるのに、するどい目でこちらを睨みつけて來たので、思わず足がすくんでしまった。

「あ…、やだ…私…。すみませんでした、迷惑かけちゃったみたいで…」

「…ああ。…やつと起きたか」

男は視線を明細に戻し、また売り上げを計算し始めた。

薄暗い照明に目が慣れて来て、男の顔をよく見ると、荒削りだが端正な顔であることが分かる。俳優のように整った髪型と、高い鼻と奥二重の目。黒いジャケットスースを来て、眠りから目覚めたばかりの恵には王子様のように見えてしまった。

「…」めんねれこ、ちよつと酔つ払つちゃつて… Hくく

「ちよつと?」

「…はい、たくさんちよつと。Hくく…」

IJの「Hくく」は、恵がぶりっ子する時によく使つ口詞である。ちなみに「たくさんちよつと」なんて日本語は存在しない。

「……」

ぶりっ子作戦が効かなかつたのか、男は沈黙後、予想外の質問をして來た。

「…お前、いくつ?」

「え?」

恵の顔は引きつった。歳を聞かれたからではなく、初対面の相手に「お前」と言つ人称代名詞を使われたことにイラッとしたのだ。

「……25です」

「…………」

若干声のトーンが低くなりながらも、質問に答えてやった。しかし、男は呆れる表情をして沈黙してしまった。

「……何か？」

恵が「言いたいことあるならはつきつと言えよ」な態度を見せると、男はこう切り出した。

「……25で一人、朝まで飲んで大騒ぎした挙句、所構わず寝るなんて……。…………オヤジだな」

耳を疑つた。初対面の相手にお前呼ばわりされた挙句、オヤジになってしまったからだ。不服と感じた発言には異議を申し立てるタイプの恵は、黙つてはいられなかつた。

「…………なつ、なんですつて？」

「……就職活動中なんだる、『まら』

「えつ？……あつ！就活のパンフレット……」

「……床に落ちてた。……就活中なら、こんな所で酔い潰れてないで、真面目に職探しするんだな」

「ちよつー！私は昨日までちやんと……」

言いつづきマソマソの恵だったが、寝ている間にバックからハラ

りと落ちてしまつたらじに弱点を突きつけられ、ぐうの音も出なくなってしまった。

「 もう店はとにかく閉店してるんだ。お目覚めのよつだし、……そろそろ帰つてくれないか？」

恵の完敗である。悪いのはすべて恵だ、こゝは素直に謝るつ、どんなにムカつく相手でも。

「 ……分かりました。大変！」迷惑おかげしてすみませんでした。では失礼します」

ムツとした表情の恵は、ツタツタと早歩きで入り口に向かつた。

「 ……おい、ちょっと待て」

「 なによ？」

「 勘定」

「 ……」

男に呼び止められ、お金を払つていなかつたことに気付く。何から今まで、この男には敵わないとらしい。

「 チヤージ、ショット9杯で6000円」

「 ……6000円」

そんなに飲んでいたのか……と落胆しながら、無職の身には痛い大

出費をするはめになり、恥ずかしいんだが、情けないんだが、悲しいんだか感情がよく分からなくなつていた。

「財布……、あれ? えつと……」

「……そんなに星空のカクテル、美味かつたか?」

「……」

恵がバックの中から手探りで財布を取り出し、お金を手渡しした所で、男はツタツタと入り口の方へ歩いていき、扉をガチャつ！ つと開けてこう言い放つた。

「…はい…6000円…」

「……確かに」

やつとの思いで財布を取り出し、お金を手渡しした所で、男はツタツタと入り口の方へ歩いていき、扉をガチャつ！ つと開けてこう言い放つた。

「さあ帰れ」

「……」

王子様だと勘違いして、一瞬でもぶりっ子を演じた自分が馬鹿馬鹿しく思えた。容姿だけで人を見るのはやめよ! …、恵がそう誓つた所で、捨て台詞を吐いてやつた。

「…ふんつ！」

今の恵には、これが精一杯。

外へ出ると、空はすっかり明るくなつていて、街は静まり返っていた。ふと時間を確認すると、時計の針は朝の5時を指していた。結局6時間近くオリオンで眠つていたようだ。

「あーイテテ、変な寝方したから背中が痛い。…つたくなによアイツ、どんどんだけ上から目線なの！偉そうに…。癒しのバー？癒されるどこいか頭に血がのぼったわ！…はあ～、頭もガンガンする。…公私混同店長に上から目線男？もつウンザリだわ～。…家に帰つて一度寝しよつ

ボロボロになつた心と身体にムチ打つて、恵はやつと自分のマンションに帰つた。

速攻ベッドに倒れこみ、長い一日が終わつたと、深いため息をつきながら田を開じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734y/>

星空の記憶

2011年12月1日12時54分発行